
ミラーワールド 真実を探す対立心

レー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミラーワールド 真実を探す対立心

【Nコード】

N9302X

【作者名】

レー

【あらすじ】

ミラーワールド紹介を読まないと分からないと思います。

魔法が存在する世界で研究所の助手をしていた少年はイークルズという組織の争いに巻き込まれてしまう。さて、どうなる事か。

1話

ハール

『はじめまして、私はクラウ・ハールという者です。かつて、イークルズによる黒族戦争によって差別の時代は終わり、そして激動の時代が始まった。戦争は英雄バグドル・ヤイバが終わらせつかの間の平和。しかし、今は激動の時代という事を忘れてはいけないよ。ここはミラーワールドの世界の一つ、世界リプダクだ。リイユウが造りだしたこの世界には変わった黒族がいる。様子を見て見ようか。』

ブラネン

『何だよリイユウ？呼びだしなんて』

リイユウの呼びだす時なんて厄介事があるに違いない、しかも本人はこちらが困るのを楽しんでいる。あいつほど捻くれた奴なんて見たことがない。

リイユウ

『悪口を考える暇があれば助手として仕事しようか？』

笑顔怖い。

リイユウ

『さて、世界ダルミトへ行ってジダイガから呪文の本持ってきてもらおうか』

ブラネン

『何でだよ？リイユウは呪文なんて必要無いだろ？あの無理矢理な

方法があるんだから』

リイユウ

『大丈夫、サポートを連れて来たからな』

話聞いた？そしてサポート？やな予感。

リケ

『やー、プラネン少々だねー』

プラネン

『何でこいつ？仲間どころか敵増やすの？』

リケ

『ええ？敵ー。あーなるほどー、以前人体解剖の実験体にしたの怒ってるー？』

プラネン

『当たり前だ、お前常識あんの？死ぬほど痛かったぞ、死なないけど』

リケ

『大丈夫だよー、黒族死なない。ほらー常識あるー。次は風穴開け上げるねー』

もう、何処にとは聞くまい。大体予想がつく。

リイユウ

『それでは、仲直りしたところでダルミトへ行ってもらおうか』

リイユウはダルミトへ続く鏡を持ってくるが、帰りは？そして老いぼれて仲直りに見えたのかよ。

リイユウ

『帰りに必要なリプダクへの鏡は向こうで探しなさい。そして、プラネン？乱暴な口調ですね？』

ああ、やばいかも。

リケ

『じゃー行こうねー』

待つてよ、向こうで鏡探すなんて無理じゃね？引つ張るなよ、え？本当に行くの？帰りは？オーイ

ハール

『鏡の中に消えて行ってしまった二人、無事に帰って来られるのか？』

リアルワールド 外伝

幸明

『あっはっは』

何だ？急に幸明が笑い出した。大丈夫か？

悠一

『幸明どうした？』

幸明

『だってさ、三人の天才の内二人が一つの部屋にいるんだよ？なにやりだすかわかんないじゃん』

悠一

『私の技術は弱者のためだ、悪意などいらない。人と人に差など存在しない！』

幸明

『わかったよ、電気技術の天才幸明はあんたを手伝うよ』

悠一

『はあ、まあいい。もう少しで転送装置ダークミストアートの完成だ』

そしてこの日を境に二人は行方不明となった。

ミラーワールド 2話

ハール

『ダルミトへ着いた二人に待ち受けるものは一体なんだろうね?』

黒い霧のせいで世界ダルミトは見通しが悪い。ジダイガめこの世界の管理者なら仕事しろよ。

リケ

『暗いよー、闇の力であふれる世界なんて邪魔だー』

プラネン

『うるさい。文句ならジダイガに言え』

ん?何かやってきたな

ペール

『カカカ、キャクジンカ。ハタシハ、ドグ・ペール』

目の前に木の人形がいる。あれは、ジダイガの部下のペールか。あいつは操作術で糸を操る事が出来る。そういえば、本人に会ったことないな?いつも人形を操作しているのか?

ペール

『オマエハ、プラネンカ。ヒサビサダナ』

プラネン

『ジダイガに会いたいんだけど?』

ペール

『ハナシハキイテイル、カカカ、オイカエスヨウニナ』

なんでだよ。まあいいや、こいつを退治すればいいのさ!

ペール

『イクゾ? 操作(首吊り自殺の貫き人形)』

両手に剣を持った人形が一体現れる。危なっかしいな。しかし、人形は動きが鈍い。

ブラネン

『無駄だ!(対極剣)で切り刻んでやる』

対極剣を光属性に変化して人形を切ると同時に操作を解除。効率的だな。

ペール

『カカカ、ヤルナ操作(集団自殺の増殖人形)』

やばい、たくさんの人形が押し寄せてくる! やっぱり命令を出してあの人形をやっつけとけばよかった。

ブラネン

『とりあえず守りを固める! 光術』
リングバリア

光属性のバリアは物理攻撃に強いが、人形は疲れを知らず剣で切りつけている。まずい、バリアが持たないな。

リケ

『誰が無視してないー？ウインドブレード風魔法』

風の刃が人形を切りにこつちに向かってくる。ん？こつち？

グサリ

ブラネン

『ギャー、首が取れたー！』

血の水溜まりが出来た。やっぱり敵だったのか？

ペール

『ココハヒクカ』

人形はその場で倒れて動かなくなった。のはいいが、どうするよ失血状態だよ？

リケ

『さっさと再生しろー、どうせ無事だろー』

ブラネン

『ひでえ』

とりあえず、ホラーだから落ちた頭を拾って首の上に乗っけるとくつつき始めた。

ブラネン

『おまえな、謝るとかないのか？』

リケ

『え？プラネン怪我してないよー、謝る理由わかんないー』

確かに怪我は既に治ってる、だが痛い、何故それがわからないんだ！

リケ

『はいはい、黒幕さんのお出ましたよー』

黒い服の目つきがとてつもなく悪いジダイガさんあらわる。

プラネン

『やっぱりお前が黒幕か！』

ジダイガ

『黒幕？なんの話だ？』

プラネン

『なんで呪文書を渡そうとしない！ペールに護らせて明らかにこうなるとわかってただろ！』

ジダイガ

『灯台もと暗し、真実は貴様らと？』

何言ってるんだこいつは、いみわからん。

ジダイガ

『信用出来るのか？リイユウを？』

プラネン

『確かにあいつはやばい奴だけど』

裏でとんでもない実験をしているのは知っている。ガルド・クロリアは心配するなと言ってたけど。

ジダイガ

『分からないか？見えないだろう。善や悪など』

リケ

『結局何が言いたいのさ』

ジダイガ

『この時代力が必要さ』

リケ

『それならさー、骨抜きにして鍋にぶち込んで煮立てやろうか？』

ジダイガ

『なかなかの虚栄心だ。いや、恐怖心か？』

リケ

『知らないねー、あんたの内臓を目の前で切り裂いてやろうか？』

ジダイガ

『怖いだろ？自らを蝕む呪いが、羽族の守りが無ければ既にこの世にいないのだからな』

リケ

『証拠なんてないよ』

ジダイガ

『何故羽族の守りを風属性に変換させているのだ？守りが壊れると困るのだろ？そして呪いの気配がする』

リケ

『・・・』

リケにかかっている呪いはよくわからないが解いてはいけないらしいな。でもなんで呪いとあの言動の関連があるんだ？まあいいや。

ブラネン

『めんどくさい！お前を倒せばいいんだろ！』

ジダイガ

『クク、足掻いてみる。現実と幻想の区別出来ぬ者よ』

ハール

『強敵ジダイガを倒すことは出来るのか？楽しみだね？』

ミラーワールド 3話

ハール

『さてと、ジダイガには見つかりたくないから、そろそろ離れるか。』

『

ジダイガ

『どうした？かかって来ないのか？』

明らかにリケの様子がおかしい。傍若無人の魔法使い二人目がここまで静かなのは不自然だ。一応一人目は勿論リユウだけだな。

プラネン

『お前を倒せばいいんだろ、単純じゃないか』

仕方ない（対極剣）を構えておくか。

ジダイガ

『幻影（二重人格の犯罪者）幻影（偽りの暗殺）さあどする？』

ん？一瞬ジダイガの姿がぶれた？きのせいかな。ジダイガは四本の剣を取り出したな、あれはジダイガの剣（四羽刺翼）だ。長い鎖のついた細身の剣でよく剣自体を投げて使ってる。まあ鎖を引っ張れば手元に戻って来るから便利なのか？まあいいや、相手が剣ならやることは一つ。

プラネン

『こっちも剣で戦うのみだ！』

先手必勝だ、向こうに向かって剣を振り回す。（対極剣）は大きめだから、四本あっても細身の（四羽刺翼）では防ぎきれないはずだ。と思ってたけど、ジダイガは後ろに飛びのいて空振り。おしい。

ジダイガ

『次はこちらだな。幻影（百の剣四の死体）』

ジダイガの剣がみるみる増えて、たくさんになった。これでどうするの？ ああ、投げてきたよ。全部一気に、なにやってんの、あぶないだろ。

グサッ　グサッ　グサッ

プラネン

『ギャー！』

数が多過ぎて避けきれない。意識が朦朧としてくる。でも、剣が増える？ ありえなくね？

プラネン

『もしかして、^{ライト}光魔法』

辺りを光で照らすとたくさんの剣は消えジダイガの手元に四本だけ残った。ついでに自分自身を見ると怪我もしていない、あれ？ 痛かったよな？

プラネン

『あれでダメなら魔法はどうだ！^{ブラックハード}闇魔法』

黒い光線がジダイガへ一直線！このスピードなら避けられないだろ！

ジダイガ

『闇を使うなど愚かだ。操作（漆黒の墮神との契約）』

あれ？ブラックハードが向きを変えてこっち来た！

プラネン

『来るんじゃない！調和術（孤独の恐怖による破壊への対立心）』

ブラックハードは破壊を拒絶する力により逸れて関係ない所にぶつかった。

プラネン

『危なかった』

ジダイガ

『プラネン、私の闇を操る力の事忘れてたな？油断大敵だ、幻影（死の鳥飛ぶ鳥）』

ジダイガは自分の左腕を切り落とした。馬鹿なの？左腕は剣を握ったまま落ちて消え、ジダイガの左腕は再生した。何がしたかったの？

プラネン

『意味わかんねー、ウェイブ剣技』

衝撃波がジダイガへ一直線、ここであいつはあれを使うはずだ。

ジダイガ

『その程度か、ブラックハード闇魔法』

衝撃波は闇の光線に掻き消されるが、予想どおり！

ブラネン

『引つ掛かったな！ライトヴァーン光魔法』

闇の光線と光の光線がぶつかり合う。ここまで予想どおり！

ブラネン

『終わりだジダイガ！リングバリア光術調和術（いがみ合う属性対立心）』

闇と光は反発し辺りを破壊しまくる。こっちはバリア張ってるから平気なのさ、ジダイガお前の負けだ。

ドカーン。

反発力って凄いな、土煙で見えないだろうが。

ジダイガ

デューキル
『闇属技』

何？ジダイガは爆発に巻き込まれて重症なはず、そもそも光の力も受けたはずだからすぐに再生も出来ないはずだ。

ヒュウ

剣を持った左腕がこっちに突っ込んできた。光術では相性悪くて防ぎきれないし、調和術では近すぎて意味がない。

プラネン

『ああそうだ、これがあったな。（サーヴェルドブック）』

サーヴェルドブックでジダイガの左腕を叩き落とし、（対立剣）で切り裂く。さすが神の本だ絶対に破けないのは本当だな。

プラネン

『切り落とした腕が今更襲ってくるとか反則だろ』

切り落とした腕の操作なんてどうやれば出来るんだろ。リイユウに聞こうかな。

リケ

『ビミヨーじゃない？ジダイガ？』

ジダイガ

『そうだな、リケ。私はプラネンがテルトスを倒す事は出来ないと推定する』

え？何この二人。後ろを振り向くと何事もなかったかのようにリケとジダイガが話をしている。

プラネン

『結局何なんだ！』

リケ

『馬鹿だなー、リイユウのテストだよ。プラネンはジダイガの幻影と戦ってたのー』

ジダイガ

『幻影（二重人格の犯罪者）は私の幻影を造るため、幻影（偽りの暗殺）は幻影の痛みを与えるためだ。注意不足に知識欠落。貴様はその程度か』

ブラネン

『ひでえ評価』

リケ

『ブラネンが馬鹿なせいでこっちも酷いこと言われたんだからねー』

ブラネン

『呪いのことは関係無いだろ』

リケ

『八つ当たりは決定だー』

ブラネン

『なにそれ、八つ当たりの自覚あり？』

ジダイガの方向を見るとあいつはニヤリと笑いやがった。確信犯だ。なんで周りには傍若無人な捻くれ者が多いのか。

ジダイガ

『イークルズが動き始めているのは知っているな？問題とされているのはテルトスだがあいつはあらゆる攻撃が効かない』

ブラネン

『なにそれ無敵？』

リケ

『破壊の力を触れただけで消してるんだよねー。しかも、こっちはテルトスに触られただけで、さよーならー』

ジダイガ

『テルトスは触れた物を消す事が出来る、そのためか奴は常に浮いている。つまり無自覚な力だと予測される』

リケ

『テルトスもー魔力変換体質だしねー』

プラネン

『結局どうやって倒すんだよ？』

はつきり言っってそんな怪物と敵対したくない。なんで倒す話になっ
てんだろ？

ジダイガ

『テルトスはイークルズの一人であるため、どんな行動に出るか分からない。いざという時にはプラネンの対立心を強める能力で無理矢理テルトスを切る方法があるのだが』

リケ

『残念ープラネンは雑魚だったー』

プラネン

『何だよそれ、知らない内に巻き込んで』

ジダイガ

『まあいい、テルトスは私が何とかする。貴様らは帰れ』

納得がいかない、いつか絶対ジダイガお前を倒す。

リケ

『鏡無いよー』

ジダイガ

『世界イエロザの鏡ならあるが?』

リケ

『それでいいやー』

プラネン

『いや、良くない』

帰れないよ?しかもイエロザは砂漠だよ?何しにいくの?

リケ

『プラネンのお家探しの旅にレッツゴー!』

プラネン

『何だそれ!』

ハール

『そんなこんなでイエロザに行く二人。そういえば、その後プラネンはリケに解体されてしまったらしいよ?』

リアルワールド 外伝2

美和

『ねえ路亜。あの二人どうなったんだろうね?』

路亜

『知りませんよ。行方不明になって数年経っているのですから生きてはいないでしょう』

美和

『いやあ、生きてるよ。向こうの世界で』

路亜

『向こうの世界? 夢物語でしょう?』

美和

『あるよ、向こうの世界、面白いねえ。』

路亜

『美和さんにはついていけないです』

美和

『何言ってるの? 路亜も行くんだよ?』

路亜

『そつでございますか』

美和

『面白いねえ、ミラーワールド。新しい研究が出来るだろうか。アハハ』

ミラーワールド 4話

ハール

『砂漠です。ああ、そういえば昔。ムア・ダルアが完全な調和は調和ゆえに対立すらも内包する。なんて言っていたな。プラネンはトルヴェザと関わりがあるのか?』

プラネン

『砂漠じゃないか』

リケ

『砂漠だねー』

プラネン

『どうすんのさ』

リケ

『知らなーい』

困る、何せ砂漠と近くに巨大な木造の船が放置されているだけ。どうしろと？

ガサツ ガサツ

誰がいるな？このあたりに住んでいるとすればあいつしかいないだろ。

プラネン

『オーイ。デューンこっち来い』

デューン

『ひあ！プラネン。リユウいないよね？』

プラネン

『いないから大丈夫だ』

リケ

『誰ーそいつ』

リケは初めて会ったんか、そりゃ警戒するな。全身ローブで隠しているんだから。

プラネン

『デューンはテールだ』

リケ

『ヘーテールかー』

リケを見てビビるデューン、以前リユウに捕まってから更に臆病になったな？そういえば、テールは竜人と呼ばれると機嫌が悪くなる。理由？知らん。

リケ

『テールの装甲ってさー現在見つかったている物質の中で最も固いんだよねー？』

デューン

『僕知らないよ、この人怖い』

プラネン

『仕方ないよ、リケは凶悪魔導士だから』

リケ

ヘルウィンドウィンドブレイサアイア
『風魔法風魔法火魔法』

バコーン

ザキッ

ドカーン

一割ぐらいは冗談だったのに。ヘルウィンドで吹っ飛ばされ、ウィンドブレードでミンチになり、ファイアで爆破、最悪だ。

リケ

『プラネンの言う事信じちゃだめだよー』

デューン

『・・・僕プラネン助け行ってくる』

いや、大丈夫だから。それに、デューンお前足元おぼつかないぞ？ああ転んだ。相当怖かったんだな。しかしリケお前には復讐だ！

プラネン

ブラックハード
『覚悟しろリケ！闇魔法』

風属性の羽族の守りによって、ブラックハードは逸れた。ああ、そうだった。

リケ

『あははー、プラネン?』

30分後

プラネン

『ひでえ』

デューン

『怖いよ怖いよ』

デューン少し泣いてないか?これ以上リケに関わるなどか言っとくか?

リケ

『結局どうするかー?』

バキューン

うわっいきなり銃撃だと!こんな事するやつは決まってる。

ギランダ

『ハッハッハー。ギランダ参上!』

プラネン

『うぜえ!』

ゴッソ

イライラして殴ってしまったのはしかたない。こいつは、レイ・ギランダ。魔法がろくに使えない魔族だ。ん?気絶してるな。

プラネン

『大丈夫か？ギランダ』

ギランダ

『ハッ、俺を倒すとはなかなかだな。しかし、これならどうだ。』

ギランダは高くジャンプ、空中を舞いながら銃撃乱射。なにあの身体能力。人間技じゃないだろ。

リケ

『ねーデューン。翼広げてー』

デューン

『わかったリケ、僕やる』

デューンが翼を広げると、ほぼ全ての銃撃が翼で弾かれた。なるほど、リケ頭いいな。

ギランダ

『ハアハア、まいったか！』

明らかにまいつているのはギランダだ。黒族は不老不死だから暑さはあまり関係ない、リケは羽族で羽族の守りによって暑さは緩和される。デューンはそもそも温度を感じることが出来ない。

プラネン

『いい加減止めたらどうだ？ここは砂漠だぞ、暑さで体力が限界なんじゃないの？』

リケ

『人が住むには過酷過ぎだねー』

デューン

『僕ここ雨降らない住みやすいよ?』

ギランダ

『今日は引いてやる!リユウの所に行かないとだからな!』

ギランダは鏡を取り出し、鏡の中に入って行った。もしかして、あの鏡で帰れるのか!?

リケ

『残念ー、世界ユアタウの鏡だよー』

プラネン

『なんで?まあいいや、砂漠よりましだろ』

リケ

『じゃー行くかー。コールドなら鏡持つてるかもしれないしねー』

デューン

『僕残る、バイバイ。』

ハール

『あの二人、いつになったら帰れるのか?』

ミラーワールド 人物

セイ・プラネン

種族 黒族

属性 闇 光

能力 対立心の強化

ポイズン・リケ

種族 羽族

属性 光 風

能力 属性変換

セイ・リイユウ

種族 黒族

属性 闇

能力 印を使える

クラウ・ハール

種族 魔族

属性 魔力

能力 死体を操る

バグドル・ヤイバ

種族 ?

属性 ?

能力 武具を作る

ドグ・ペール

種族 ?

属性 魔力？

能力 糸を操る

セイ・ジダイガ

種族 黒族

属性 闇

能力 幻を見せ現実を分からなくする。

ラウル・デューン

種族 テール

属性 無い

能力 無い？

レイ・ギランダ

種族 魔族

属性 雷

能力 少しでも機械を扱える

ミラーワールド 5話

ハール

『さて、コールドが管理する世界ユアタウに着いたわけだけど、ヤバイ奴がいるな』

リケ

『ユアタウに着いたー』

プラネン

『とりあえずコールドの所へいくんだろ？』

リケ

『そうだねーとりあえずはー。あれ？町の一部が消滅してる？』

ここからでは良く見えないが確かに町の一部が消滅してる、なんなんだよ一体。

リケ

『急ぐよプラネン！コールド一体なにやってんの、これ以上被害を大きくするなら解体してやる！』

プラネン

『物騒だな、仕方ねえ急ぐか』

町に辿り着くと悲惨な光景だ、町の一部が消滅しクレーターのよう
に地面がへっこんでる。

リケ

『へっこんでる所にコールドと誰かがいるよ』

本当だ、コールドが弓を構えて明らかにもう一人を警戒してる、もう一人の方は明らかに空中を歩いている。ん？、まさか。

ブラネン

『あいつがテルトスじゃないか？』

リケ

『うわーどうすんのー』

コールド

『テルトス今すぐに立ち去れ』

テルトス

『いや、その前に新たな客人に挨拶をしようか。はじめまして私はワー・テルトス、イークルズの一人だよしく』

コールド

『立ち去らないならば攻撃を開始する』

テルトス

『お前とは話しがうまくいかないようだな』

コールド

『攻撃開始。アイスネーク召喚』

ピューン ピューン

攻撃は弓を放ちながらアイスネークに突撃をさせるが、全ての攻撃はテルトスに触れると消滅してしまった。

テルトス

『無駄だ、どんな攻撃も効かない』

コールド

『作戦変更、体温低下による身体能力の破損を狙う。召喚氷魔法』

アイストボガフリーズ

ビュオー

召喚した氷の壁と吹雪で寒い。さすがコールドだな。

テルトス

『やはり、実力者は厄介だ。虚撃』

ロストストーン

テルトスは奇妙な石を作りアイスストーンにぶつけると両方が消滅した、まじでか。

リケ

『ええ！虚撃！禁忌だよ。使用者の精神を歪める力、使いすぎると大変な事になるよ！』

コールド

『虚撃による反物質の創造、守りを必須とし作戦を続行する、光術』

グロースバリア

リケ

『コールド危ないよ、加勢するよ。風魔法』

トルネイド

ビュオー

更に吹雪が強くなったな、よし、こちらも加勢するか！

プラネン

『テルトス覚悟しろ闇魔法』
ブラックハード

テルトス

『愚かしいな、
ラストワールド虚撃』

テルトスの周りに奇妙な波動のようなのができて周りにあった物を消滅させた。

テルトス

『ポイズン・リケ。イーグルズの仲間にならないか？』

リケ

『やだね、何で町を消滅させた奴の仲間になるのさ、断じてやだ』

テルトス

『私達イーグルズの組織の大きさを知らしめるための事だ、これでイーグルズの噂は広がるだろう』

リケ

『知らないね、
ラーサ魔法』

テルトス

『マジックバリア
光術残念だ』

あれ？なんでバリアで攻撃を守るんだろ？

リケ

『アハハ、わかつちやった！当たり前だよ精神に影響する魔力属性を反物質で防げるわけないもんね！魔法』
マジックソード

リケさすがだ、これでテルトス倒せるじゃないか！

テルトス

『勝ったと思うか？魔法』
マジックアウト

テルトスはマジックアウトでリケの魔法を消すのか？

コールド

『避けるリケ！』

リケ

『え？』

マジックアウトはリケ自身に当たった。ヤバイ、羽族の守りが解除される！

リケ

『う・・・あ・・・ゴホ』

リケは大量に血を吐いて痙攣している、このままじゃ、とりあえずリケの魂を身体に留める。

ブラネン

『調和術（留まる復讐あの世からの対立心）』

コールド

リターナヒール
『光術』

治療はコールドに任せるしかないな、テルトスと一対一か。

テルトス

『セイ・プラネン。イークルズの仲間にならないか？』

プラネン

『なるかよ！そんなの』

テルトス

『町の心配をしているのか？大丈夫だ、あそこに住んでいた人々は既に避難している』

プラネン

『え？無事なのか？』

テルトス

『当たり前だ、イークルズが目指すものは完全な平等だからな』

プラネン

『黒族差別なんて昔話だろ』

テルトス

『今現在、差別が完全に無いと言い切れるか？黒族に排他的な世界など所々にあるし新種族達は引きこもりになっている。だから、イークルズは巨大な組織になった』

プラネン

『・・・』

テルトス

『イークルズに入るなら、過去の記憶を探す手伝いもしてやろう。記憶喪失なんだろう？』

プラネン

『何でそれを？』

テルトス

『さあな？どうする。共に完全な平等を手に入れよう、神は人に差を付けはしない全てが対等だ』

どうすればいいんだよ！

頭がゴチャゴチャになってくる。

ジダイガ

『惑わされるな、プラネン』

えーと、何でジダイガいるの？

プラネン

『ジダイガ、何で？』

ジダイガ

『テルトスは私が止める、貴様は帰れ』

テルトス

『ジダイガか。出来れば会いたくは無かった』

ジダイガ

『足掻いてみる、現実と幻想の区別つかぬ者よ。操作（空間の墮神との契約）』

空間が割れて狭間に落とされる！ジダイガの方を見ると二対の黒い翼が見えた様な気がする。

そして、落ちた先は世界リプダクだった。

ハール

『さて、そろそろ出番かな？あいつが自分の過去を知ったらどうなるんだろっね、楽しみだな』

イークルズ

テルトス視点

キラー

『テルトス、ユアタウはどうでした？』

テルトス

『キラー様、作戦は良好です。しかし裏をリロードに任せて大丈夫でしょうか？』

キラー

『リロードなら大丈夫だろう、ダークミストアートの使い方も教えてある』

テルトス

『了解しました』

キラー様は機械の修復のために別の部屋へ向かって行った。

テルトス

『フレイ・ストグ。ヘラ・ハカ。レイ・バルグ。こちらに來なさい』

ストグ

『テルトスさん！ユアタウで暴れたんだって？俺にも行かせるよ！』

ハカ

『ストグうるさい』

バルグ

『・・・』

三人とも実力者のはずだが、これでは・・・

テルトス

『ストグ、私たちは囧である事を忘れてはいけません、極力被害は出さないでもらいたい』

ストグ

『テルトスさん、わかってるさ。いくぜ！』

ハカ

『テルトス様、我はストグのストッパーとなりましょう』

ストグとハカは一緒に行動するのか、ハカ頑張ってくれ。

バルグ

『テルトス。俺は個人で行動する』

テルトス

『無意味な復讐は止めなさい、いつまでも終わりませんよ』

バルグ

『テルトスには関係ない』

バルグ、何故解らないのですか。復讐は復讐しか呼びませんよ。悲しいだけなのに。

床を見るとキラ様が落としたリアルワールドの言葉で書かれた古い本が落ちている。確か名前は新約聖書と言っていたはずだ、キラ様が話してくれた覚えている人も少ないリアルワールドの昔話、差別なく人を助け十字架に磔にされ殺された聖者の話し。私は世界に敵対されてもキラ様に着いていく。

ミラーワールド 6話

ハール

『プラネン起きなよ』

プラネン

『うつ、痛い』

起きると目の前には知らない人、ではなく知らない死体が？ええ！

ハール

『プラネン君、この世界を壊さないか？』

プラネン

『誰だよ、馬鹿なの？』

リプダクを壊してどうするのさ？

ハール

『ハールだよ。ミラーワールドを壊そうよ、こんな不安定な世界なんていらぬよ』

周りを見渡してみる、草原と研究所しかない、箱の中の様な世界。

ハール

『リアルワールドは風が吹き、天候があり、夜や朝というものがある。ミラーワールドにはないものだ。時間の流れがない世界なんてただの粗悪品だよ』

ブラネン

『時間のながれ?』

この世界リプダクは常に明るい、他の世界も差はあるものの全てが時間の流れを感じない。

ハール

『この世界はなんて寂しいんだ、普段はブラネンとリイユウしか住んでいない』

世界リプダクはリイユウが戦争を逃れるために作った世界。リイユウが拾ってくれて今はここに住んでいるがその前は一人だったんだろつか

ハール

『世界は滅ぶ運命を背負い生まれる。だがこの世界の終焉をムアは預言しなかった』

ブラネン

『終焉?よくわからない』

ハール

『リイユウに拾われる前の記憶がないんだよね?ロトユ・サーヴェルドを捜しなよ』

ハールはいつのまにか居なくなっていた。

リイユウ

『ブラネンさつさと来なさい』

ああ、リイユウが呼んでる。後で考えればいいか

プラネン

『わかったよ、今行く』

研究所まではせいぜい5分、この世界は端から端まで行くのに1時間ぐらいしかからない、知っている中で一番大きな世界はイエロザで端から端までが8時間ぐらいかな？因みに端まで行っても反対側の端に来てしまう、何もない虚無の空間に落ちないようにするための対策で世界を作る時は必ず設定しないと危ないんだとさ。世界は特別な鏡に神の言葉を書き込む事で作れるらしいがわかん。作った世界の鏡は弄られ無いように隠しておいて、その世界に入るのには世界の鏡のコピーを使うから世界そのものを改造できないらしい。

リイユウ

『何を考えている？ああそうだ、リケはコールドが治療している、ジダイガはテルトスを追い払ったらしい』

プラネン

『そうなんだ、一見落着だな』

リイユウ

『まだですよ？』

プラネン

『まだかよ』

とりあえず研究所に到着、扉を開くと猫と狼が。

リイユウ

『拾いました』

プラネン

『へー、名前は？』

リイユウ

『・・・まだですよ』

プラネン

『やっぱり』

リイユウ

『狼は・・・ウルフ』

プラネン

『そのまんま！』

リイユウ

『猫はキャ』

プラネン

『それ以上言わせねえ！』

リイユウ

『キャか・・・』

プラネン

『いや、駄目だろ！』

猫をみると尻尾が / みたいになっている。

リイユウ

『名前はルートだ』

プラネン

『もついいよ』

とりあえず部屋に戻って考える。イークルズは昔差別されている黒族を助けるためと言いホワイトレッグという羽族主義の組織と戦争。ホワイトレッグを倒し大きな被害を出した、イークルズはその後被害を広げたためヤイバによって壊滅したはずらしい。記憶がないから詳しくはわからないが争うのは人々をまとめる人間がいらないからだと思う。イークルズを倒して平和を手に入れよう。まずはそこからだ。

ミラーワールド 7話

プラネン

『暇だ』

やることが無い、リイユウは化学実験？とやらをしている。なんか液体みたいなのを混ぜてた。

気がつくとも目の前に黒いローブを着た謎の人物がいる。

サーヴェルド

『サーヴェルドだ、いきなりで悪いがサーヴェルドブックを返して欲しい』

プラネン

『返せるなら返してやるよ、この本気がつくとも手元にあるからな』

実際にサーヴェルドブックをどこにしまっても捨ててもいつのまにか手元にある、気がついた頃からずっとこの本を持っている。

サーヴェルド

『記憶がないのか？ならばしかたない。もし思い出したら決断するんだろうな。一つだけ教えてやるう、プラネンお前は、生き物ではないのさ、我と同じような存在だ。世界の図書館で待っているぞ』

サーヴェルドはその場で消えてしまった。生き物ですらない？何を言いたかったんだろう。

草原にねっころがると何もない空が見える。小さな少年が研究所の方へ走っている。相変わらず白髪混じりだな、ようやくここまで来たかガルド・リバーシア。止めとけばいいのに・・・

リバーシア

『リイユウ！クロリア姉さんを解放しろ！』

リイユウ

『クロリアには実験の手伝いをしてもらってるんですよ』

リバーシア

『嘘つくな！調和術（我が身の影と他人の影）』

範囲内の影を実態化する調和術か、無駄なのに。

リイユウ

『いい加減にしましょうね。向こうに行きなさい、オリジナル呪文00番』

リバーシアの姿は消えた。リイユウは普通に話しているように見せて実は呪文の無理矢理な改ざんをして発動させた。最後のオリジナル呪文00番は改ざんしたときのお約束らしい。改ざんは莫大な魔力を使い、更に改ざんしてもすぐに元の言葉に戻ってしまった。め効率が悪い。リイユウだからこそ出来る芸当だ。

リイユウ

『新しい実験体が入ったな』

リイユウはニヤリと笑い研究所へ入って行った。既にリイユウはまともではないな、長く生きた黒族は段々とまともではなくなると言

うのは本当なのか？

リイユウ

『プラネン、あなたも実験体になりたいですか？』

プラネン

『やめろ！』

リイユウはいつも笑顔だが内心怒ってるな。人の心が読めるのかな？まあいいか。

ミラーワールド 8話

プラネン

『最近暇だな、イークルズもないし』

最近はいークルズが何かをしているという話を聞かない、ジダイ
ガがなんかしたのか？

リイユウ

『暇そうですね、プラネン』

プラネン

『確かに暇だ』

リイユウ

『では、少し勉強をしましょうね』

プラネン

『めんどくさい』

勉強するくらいなら草原でねっころがってたほうが何倍もいい。

リイユウ

『プラネン？あなたはバカなのですから少しくらい勉強しましょう
ね？』

リイユウは杖で地面に印を描きはじめた。たしかそれは束縛の印じ
やないか。

ブラネン

『わかったから、止めてくれ』

リイユウ

『わかればいいのです。まあ、勉強とは言っても昔話について考えてもらっただけですから大丈夫』

ブラネン

『何だよ、昔話って』

リイユウ

『堕神の神話ですよ』

ブラネン

『あー、聞いたことあるな』

リイユウ

『ある時、世界に反逆した神は堕ちて堕神となりました。堕神は自分の世界を創り出しその世界を治めていました。しかし絶対神はこれを許さず世界の力を借りて堕神の世界の時間を止めてしまいました。』

ブラネン

『ああ、たしか。時に拒絶されし世界だっけ？』

リイユウ

『そうです、時を止めてその世界を住民ごと封印しようとしたのです。しかし、堕神の仲間に共鳴の預言者がいたのです。預言者は全てを知り封印される前に世界を二つに分断し片方に住民を避難させ見つからない場所に転送したため絶対神は見つける事はできなかった

た
』

プラネン

『えーと、それが存在しなかった世界だよな？』

リイユウ

『そうです、それが墮神の神話の要約です』

プラネン

『へー、だから？』

リイユウ

『印術（五亡星の束縛）リムー闇魔法』

ガラガラドカーン

リイユウは印を完成させ動きを封じたあと闇の雷を呼び出しぶつけやがった。うわー痛てー。

プラネン

『何すんだ！』

リイユウ

『やっぱりバカですか？この神話が事実かどうかで他の世界の存在を確認出来るのですよ』

プラネン

『謎の二つの世界か、でも結局神話だろ？』

リイユウ

『共鳴の預言者の預言のかけらが残っているのですよ』

プラネン

『あー、面倒だ』

リイユウ

『相変わらずですね』

リイユウは研究所へ歩いて行った。預言のかけらか、共鳴の預言者は化け物だという話を聞いたことがあるな。

バキッ

プラネン

『いてえ！』

後ろを見るとギランダが飛び蹴りを仕掛けていた。

ギランダ

『ハッハッハ。プラネン敗れたり！』

プラネン

『毎度毎度突っ掛かってくるな！ブラックハード闇魔法』

ギランダは空中に高くジャンプして避けやがった。しかも、空中を舞いながら銃を乱射。

ギランダ

『俺を簡単に倒せると思うなよ！』

銃なんて珍しい武器使いやがって、そういえば魔法使いは銃を使えないらしいな、魔法の力は法則や現実を歪めるから機械とは相性が悪いらしい。ギランダはほとんど魔力を持たないから機械を扱えるらしい。

リイユウ

『いい加減にしましょうか？喧嘩両成敗です。闇魔法^{ダークゲラウンド}×1000』

その後の事はノーコメント。

ミラーワールド 9話

プラネン

『ああ、酷いめにあつた』

ギランダは既に帰つたようだ、凄い回復力だな。

空間にひび割れが出来その隙間からあの人物が。

ジダイガ

『プラネン貴様は暇そうだな』

プラネン

『暇だよ、イークルズも出てこないしさ』

ジダイガ

『能の無い輩め、まあいい貴様は撒き餌を必死に追いかけていればいいさ』

ジダイガは言いたい事だけ言つと空間に穴を空けてダルミトへ帰つた。いつもあいつは規格外な奴だよな。

ジダイガは闇と空間を自在に操作する事が出来る。リユウ曰くあれは操作ではなく支配らしいが違いが解らない。

ストグ

『お前がプラネンだな？フレイ・ストグだ』

プラネン

『何しにきたん？』

いつの間にかいたストグという人物。

ストグ

『もちろん正々堂々と勝負だ！』

ブラネン

『めんどくさい』

何こいつ？ギランダ並の戦闘狂か？

ストグ

『きくみみなんて持たねえぜ？岩属技（岩龍崩拳）』

ストグは地面を殴ると地割れを作り出した。

ブラネン

『調和術（人間の欲望大地からの対立心）』

地面と対立して空中に浮く事で地割れを回避、すぐさまストグはこ
つちに殴りかかってくる。

ストグ

『岩属技（岩龍壁拳）』

ブラネン

『接近させるか！ブラックハード闇魔法』

ストグめこれなら避けられ無いだろ。

ストグは避けようともせずにブラックハードを拳で受け止める、冗談じゃないよ。

ストグ

『グオー！返してやるぜくらえ！岩属技（岩龍裂拳）』

ストグはブラックハードを殴って打ち消し衝撃波を飛ばしてきた。まずいな。

リイユウ

『印術（三亡星の祝福）』

衝撃波は印の守りによって打ち消された。リイユウタイミングバツチリだ。

プラネン

『助かった。いくぜリイユウ！』

リイユウ

『私の世界に無断で入って来るとは、礼儀知らずですね。印術（六亡星の呪縛）』

ストグ

『グアー！』

呪縛によって身動きが出来ないストグ、苦しそうだ。

リイユウ

『さてと、次はどうしましょうか？』

ガシャーン

プラネン

『一体なんだ！』

細長い瓶の様な物がぶつかって来たと思えば、瓶は割れて液体が飛び散った。その液体に触れたものは凍ってる。

ハカ

『我はヘラ・ハカ。ストグよ何故我の忠告を聞かぬ』

ストグはまだ呪縛に捕まっている。ハカは細い瓶を何本か取り出し投げてくる。

プラネン

『うわ、冷てえ！』

身体が凍りついて自由がきかなくなっている。何だよ連続でピンチ。

ハカ

『黒族は自由を奪う事で再生能力を無効化する』

ハカは更に瓶を投げてる、これ以上はやばい。（対極剣）で瓶を切り裂く。と、瓶が割れて液体が直にかかる。割れたら意味なかった！

リイユウ

『バカですね・・・印術（九亡星の時間）印術（八亡星の印）』

九亡星の時間で氷の溶ける時間を早める、八亡星の印を所々に描き魔法のターゲットにする。リイユウ無茶苦茶だ。

ハカは辺り一面に八亡星の印があるため自由に動けずにいるな、印の上に移動した瞬間にやられるからそりゃあ慎重になるだろ。

ハカ

『リイユウよ、私の負けだ。しかし、イークルズはその願いを叶えるだろう』

ハカは瓶を地面に落とすと瓶が割れて中から大量の煙りが出て来た。

ブラネン

『見えねえ』

煙りが晴れると二人の姿はなく鏡が落ちている。

リイユウ

『鏡で逃げましたか』

鏡は世界ロンハイズの鏡だな。あそこはあまり行きたくないが。

リイユウ

『察しがいいですね、行きなさい』

ブラネン

『わかったよ行けばいいんだろ！』

ロンハイズなんてあのイークルズの奴ら明らかに誘導してるだろ！

リイユウもわかって送り込もうと・・・

プラネン

『帰りは？』

危ない危ない、鏡の中へ行く所だった。

リイユウ

『知りませんよ？』

リイユウは背中を蹴り飛ばして鏡の中に無理矢理突っ込みやがった。
おぼえてろよ！

ミラーワールド 10話

リード

『何故お前がここにいる！汚らわしい黒族め！』

プラネン

『知らねえよ、お前はおとなしく警備でもしてろ！』

現状確認、ロンハイズに着いた、まだ問題ない。目の前にトレイト・リードがいた、まだ大丈夫。リードがいきなり文句を言ってきた、なんだよ！

リード

『警備はしている！お前を追い払うためにな！』

プラネン

『あ？黒族差別なんて昔話をまだこだわるのか？古い奴だな！』

リード

『黒族差別ではない、何から何まで中途半端なお前が来る事が災いだ！』

プラネン

『知らねえ！誰が災いだ！』

リードは元々黒族を嫌う傾向があるが他の黒族にはここまで極端に行動に表す事はない。何これ？嫌われる理由が毎度ながら見当たらない。

リード

『お前が災いだ！さつさと帰れ！安定の時代の遺産を壊すな！』

思い出した、間違えて古い搭の一部を崩したんだった。この世界の管理者だから怒るのは当然かも知れないが、管理者なら管理しろ！この世界は黒族を嫌う傾向があるぞ！でも、もしかしたら管理者の影響かも知れない。

プラネン

『あー管理者だからか、でもさ、管理者がこうだからこの世界の人
は嫌みな人多いよな？』

リード

『お前が黒族だから悪い！』

プラネン

『は？好きで黒族やってる訳じゃねえ！人を外見で判断するな！』

リード

『お前の外見などただのガキだろうが』

外見を言うな15くらいに見えるかも知れないが成長が止まってるんだから結構長く生きてるはず。リイユウなんて外見20歳で実際は100歳を超えているらしい。

ジャック

『でもプラネンは頭がガキだと思うんだよね、僕はさ』

ファイバー

『ジャック、いきなりそれは失礼だろ』

近くを通りかかった二人はこっちに気づいて声をかけてくるが、ポイズン・ジャックお前は10歳程度の癖に生意気だ！でも、リケの弟だから仕方ないのか？そして、ポイズン・ファイバー。兄としてリケとジャックをどうにかしろ！コールドと違ってお前は頼れないけど。

リード

『二人とも、まずは挨拶ではないのか・・・』

リードはかなり飽きているが会った瞬間に文句を言っお前もどうなんだ？

ファイバー

『すみません、久しぶりですねリードさん』

ジャック

『でも、リードもプラネンに挨拶しなかったね？』

そうだ！ジャックお前が正しい！

リード

『ジャックさん、何を言っているんですか？頭の中が悪臭放っているって、そうないつに挨拶なんていりません』

ジャック

『わかった、僕はリードの言った事理解したよ』

プラネン

『はあ?!納得いかねえ!』

リード

『そのままの意味です、おばかさん？』

リードお前を遥か遠くへ吹っ飛ばしてやろうか？

ファイバー

『まあまあ、リードさんもプラネンさんも落ち着いてくれないか？』

ジャック

『公共の場で喧嘩なんて、ダメだねー』

リード

『チッ！仕方ない』

プラネン

『あーうざかった』

後ろを振り向いてみると戦闘狂がこっちに向かって走っている。だから、うぜえ！

ストグ

『俺だ！プラネン今すぐ勝負！』

プラネン

『うぜえ！ブラックハード闇魔法』

リード

『世界を荒らすな！ウインドブレード風魔法』

ストグ

『ええ！卑怯者め！』

いきなり攻撃されたためどうする事も出来ないストグは、逃げ出した。

プラネン

『鏡で逃げるなんて卑怯だ！』

発動した魔法は止められない、ブラックハードは搭に激突して一部を崩壊させた。何かヤバくね？

ドカーン ガラガラー

恐る恐るリードの方をしてみる。

リード

『お前はよっぽど逮捕されたいようだな、サンダーペイン雷魔法』

リードは電気の塊を投げてきた、サンダーペインは当たった相手を痺れさせ動けなくする。さて、逃げるか！

リード

『待て逃げるな！』

嫌だね、ストグが使った鏡へ入って逃げる。逃げ道を作ってくれたストグに一応感謝。

ミラーワールド 11話

プラネン

『寒い』

ここは世界ヴァトウズ、海と海に浮かぶ巨大な氷しかない世界だ。
この世界に住んでいる人は一人しかいない、仕方ない会いに行くか。

プラネン

『ヘラ・ロットいるのか？』

とりあえず、氷で造られた家の前で呼んでみる。

ロット

『久しぶりですね、プラネンさん。これもまた神のお導きでしょうか』

プラネン

『いつも何でそうなる』

神と言うよりストグの導きだ、そもそも神なんているのか？

ロット

『神を信じなさい、あなたは救われます』

プラネン

『神が何をするってのさ』

ロット

『トルヴェザ様は調和で人々を救われます』

プラネン

『トルヴェザは封印で永遠の苦しみを与える神だと言っ話を聞いたことがあるんだけど？』

ロット

『それは殺しを行わないための策なのですよ』

そっちの方が残酷だと思っただけど。

何も無い空が割れているまたあいつか・・・

ジダイガ

『トルヴェザは十字架で封印を行う神。イークルズにとっては皮肉だな』

ジダイガ、空中に立っている事についてはまだいい、何で逆さま？
頭から落ちたりしないの？

ロット

『神の反逆者よ、何しにここへ来た』

ジダイガ

『私は世界フェシオダが大変な事になっているとプラネンに伝えに来ただけだ』

ロット

『ならば去れ反逆者』

ジダイガ

『反逆者？何の事だ？』

ジダイガは考え込んでいる、本当にわからないようだ。

ブラネン

『反逆者ってどうゆう意味？』

ロット

『知らない振りをしても無駄ですよ？去らないなら、3、2』

ロットはジダイガを指差して数を数えている、何をするきだろ？

ロット

『、1、0』

ドカーン！！

ジダイガの身体が爆発した！？ぐちゃぐちゃになったジダイガの死体は氷の上に落ちるかと思っただけど空間に穴が空いてそこに死体は落ちて行った。しかし、グロテスクだったな。

ブラネン

『何やったんだ！？』

ロット

『いや、ジダイガさんの内臓を爆薬に作り替えて発火させただけですよ？』

ブラネン

『何それ！？そんな事できるの？』

ロット

『錬金術とは物体の変換、化学の基礎であった力です』

プラネン

『ふーん・・・』

よくわからない、リユウならわかりそうだ。

ロット

『では、3、2、1、0』

ロットは氷に手をつけると氷は鏡に変化した。すげえ！

プラネン

『それをどうしろと？』

ロット

『世界フェシオダに行くのでしょうか？』

プラネン

『ああ、そうだった。行きたくないけど』

ロット

『大丈夫です。神はいつでも見ています』

プラネン

『あーそですか』

ロット

『神の御加護がありますように』

プラネン

『ハア・・・』

ロットは無視してとりあえずフェシオダに向かうか・・・行きたくないけど。

ミラーワールド 12話

プラネン

『・・・ハア』

ここは世界フェシオダ、世界の端から端まで管理が行き届いていてとても治安がいい。リード達の本部もここにあり本当にいい世界だ、黒族以外は・・・。

プラネン

『だから、いい加減にしてくれ・・・』

リード

『黒族がこの世界に入り込むなど災いと呼ぶな！出ていけ！』

プラネン

『だから、ジダイガに呼ばれたんだよ』

リード

『問答無用だ！あの戦争の事忘れたか！』

プラネン

『だからさ・・・』

何でこんなにリードの遭遇率が高いのさ、何かの呪い？

リード

『そもそもだ・・・』

ドカーン バコーン！

リードの本部の方で爆音がする。襲撃みたいだ。

リード

『チィ！タイミング悪すぎる！さては黒族の仲間か！？』

ブラネン

『知らねえ』

知らんて、しかしタイミングが良いな。これでリードから離れられる。

リード

『仲間じゃないならお前も来い！』

えー、仕方ない。でも勘違いはやだし。

ブラネン

『仕方ねえ』

リード

『では行くぞ！』

リード速い！リードは何気ない様子で走っているが、こっちは汗だくで一生懸命追いかける。風の加護は便利なんだな。

本部に着くとコールドが誰かを追っている。

リード

『追いかけるぞ！』

プラネン

『ヘーイ……』

コールド

『現情報、標的は魔族。影亡き者の剣を奪い逃走。動きを停止させるには雷魔法が有効』

あの武器盗まれたってかなりヤバい事なんだけど、影亡き者の武器は触れただけで黒族を消滅させる危ない物だからトレイト達はその全てを管理して封印している。

バルグ

『俺はバルグ。これで復讐する、お前らに捕まる訳にはいかない』

リード

『逃がすわけにもいかない！サンダーベイン雷魔法』

バルグ

ストーンヘイル
『岩魔法』

属性の相性が悪すぎるな、雷は岩の壁に当たり消滅した。

リード

ヘルウィンド
『岩なら風だ！風魔法』

岩の壁は風圧で崩れた。風属性の方が有利だからな。

コールド

『行動制限、氷魔法』
ギガフリーズ

吹雪で視野が狭いな。

プラネン

『今だ！闇魔法』
ブラックハード

バルグ

『危機か、火魔法』
オーバーパワーバーナ

熱線とブラックハードがぶつかり合う。

ジュー、シュー

高熱で沢山の水蒸気に包まれる。

リード

『見えん！風魔法』
トルネイド

風の竜巻が水蒸気を吹き飛ばすが、バルグの姿がない。

プラネン

『バルグの姿がない？どうすんの？』

リード

『仕方ない、分割して搜索だ。プラネンお前は世界プロウスに行け』

プラネン

『こうなったら仕方ねえ』

コード

『ユアタウに撤退、以後搜索』

リード

『では、プラネン行け』

プラネン

『わかったよ』

リードは世界プロウスの鏡を取り出す。仕方ねえから行くか。

もし見つからなかったらどうしよう・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9302x/>

ミラーワールド 真実を探す対立心

2011年11月17日18時46分発行